

第IV章 考察：土佐山田における古墳築造と大元神社古墳

はじめに

高知大学考古学研究室では3年にわたり大元神社古墳を調査し、その内容を明らかにしてきた。ここでは、まず大元神社古墳を高知平野の古墳の中に位置づける。次に、大元神社古墳の位置づけと大きく関わる、物部川西岸にある土佐山田地域の首長墳の動向について考察を行いたい。

1 土佐後・終末期古墳における大元神社古墳の位置

大元神社古墳はTK209型式期に築造された直径18mの円墳であることが判明した。埋葬施設は大きく破壊されていたが、調査の結果、玄室長4.3m以上・玄室幅1.3m以上・羨道長は1.0m程度・羨道幅80cm以上の規模を有する畿内系横穴式石室であろうと推測された。壊滅的な破壊のため副葬品は須恵器以外に出土していないが、子持器台が出土したことは注目される。筆者は、先学に学びながらこれまでに土佐の後・終末期古墳についておおよその傾向を示したことがある（清家2006・清家2007）。今回の調査で判明した大元神社古墳の諸要素を土佐の古墳の中にまずは位置づけてみよう。

石室規模 土佐の古墳の中でもっとも情報が多い石室について見てみることにしよう。前稿では、石室の玄室面積から特大型（14m²以上）・大型（10m²以上14m²未満）・標準型（4m²以上10m²未満）・小型（4m²未満）の4分類ができると示した（清家2006・清家2007）。石室規模は古墳の階層差をシャープに反映するので、それぞれの石室規模に応じて特大型古墳・大型古墳・標準型古墳・小型古墳と呼び変えることが可能である。特大型・大型古墳は岡豊を除いて高知平野に散在し、大型は河川や丘陵で区画される領域を統括する地域首長墓であり、特大型はそうした首長をとりまとめ高知平野を代表する盟主的古墳であるとの見解を示したのであった。

大元神社古墳はどのような位置にあるのであろうか。大元神社古墳の石室は、玄室長4.3m以上・玄室幅1.3m以上であり、玄室面積は5.6m²以上との結果となっている。石室破壊の痕跡という間接的な情報で、左記の数字は最小の見積もりであり、大型に属する可能性は皆無ではないが、標準型の横穴式石室である可能性が高い。羨道は短く、玄室長は幅の2倍以上という細長いタイプの玄室であることは、土佐では比較的多く見られるタイプである。

この標準型石室を持つ古墳は土佐山田にも多く、小倉山古墳（玄室面積8.8m²、以下同じ）・須江ツカアナ古墳（8.6m²）・西久保古墳（7.8m²）・前行山1号墳（7.0m²）・上方古墳（6.7m²）・椎山1号墳（6.1m²）などがあり（表1、図35）、大元神社古墳の石室規模は突出したものとは

いえない。

墳丘 土佐の後・終末期古墳で墳丘調査が行われた古墳は少なく、墳丘測量図すら作成されていない古墳も多いため、各古墳の墳丘規模には不確定要素が多い。しかし、おおよその傾向はつかむことができる（清家2007）。墳丘規模が20mを超える古墳は伏原大塚古墳と小蓮古墳で、ともに特大型石室を持つと考えられる。墳丘規模が15mを超える古墳には、特大型あるいは大型石室が設けられている一方、こうした古墳には標準型や小型石室がなく、墳丘規模でも一定の階層差が認められた。しかし、大型石室の中には直径10m程度の墳丘も存在するため、大型石室とそれ以下の古墳では、墳丘規模において明確な差を見いだしにくいところもある（清家2007）。

表1 土佐山田の主な古墳と石室

	古墳名	位置	玄室面積 (m ²)	出土遺物
1	伏原大塚古墳	香美市土佐山田町百石町	14.0	子持器台1・子持広口壺1
2	小倉山古墳	香美市土佐山田町楠目字小倉山	8.8	
3	鏡野学園前古墳	香美市土佐山田町楠目字伏原山	8.0	
4	雪ヶ峯1号墳	香美市土佐山田町楠目字楠目山	4.6	杯身・直口壺・壺
5	大元神社古墳	香美市土佐山田町楠目字青サレ山	5.6以上	子持器台1・高坏ほか
6	前行山1号墳	香美市土佐山田町楠目前行	7.0	台付直口壺・台付椀
7	桜ヶ谷1号墳	香美市土佐山田町楠目字桜ヶ谷	?	子持壺1
8	須江ツカアナ古墳	香美市土佐山田町須江字五反田	8.6	須恵器・鉄鏃・馬具・耳環・刀子
9	新改横走古墳	香美市土佐山田町新改横走	12.5	須恵器・馬具・鉄鏃・刀子・耳環ほか
10	西ノ内2号墳	香美市土佐山田町新改横走	7.6	須恵器・刀子・鉄鏃・石突他
11	西ノ内1号墳	香美市土佐山田町新改横走	4.3	
12	椎山古墳	香美市土佐山田町新改横走	6.1	須恵器・馬具・鉄鏃・玉類・耳環
13	上改田古墳	香美市土佐山田町上改田	9.7	杯身・台付直口壺
14	西久保古墳	香美市土佐山田町久次字西久保	7.8	
15	上方古墳	香美市土佐山田町伏原	6.7	

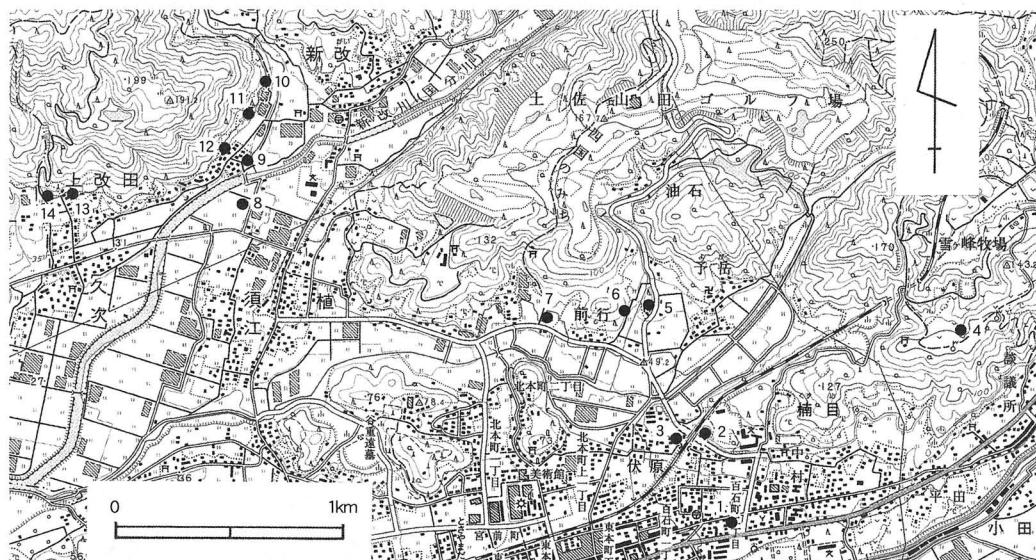


図35 土佐山田における主な古墳（番号は表1に対応）

大元神社古墳は直径18mの

円墳であった。この規模は他地域ではさして大きなものではないが、土佐では侮られるべき存在ではない。15m以上の古墳は大型石室・特大型石室を有するという傾向が土佐では認められるからである。

しかし、大元神社古墳の石室は標準型である可能性が高い。墳丘規模に比して石室規模が

小さいのである（図36）。墳丘調査が行われた古墳が少ないという不安材料はあるが、これが大元神社古墳の特徴の一つともいえよう。

装飾須恵器 装飾須恵器の出土は土佐では11例目であり、子持器台に限れば5例目である（表2）。これまでに伏原大塚古墳・舟岩2号墳・舟岩8号墳・久礼田高松古墳・明見彦山3号墳・桜ヶ谷1号墳・大木戸古墳群から装飾須恵器の出土例が知られている。このうち桜ヶ谷1号墳や愛宕山古墳⁽¹⁾は古墳の内容が不明であり、大木戸古墳群例はいずれの古墳から出土したのかが判明しない。この3古墳は分析から除外して考察を行うことにしよう。

伏原大塚古墳の石室は特大型石室の可能性があり、墳丘も土佐最大規模である。子持器台と子持広口壺が出土している。舟岩2号墳は大型石室を持つ古墳である。子持器台と子持壺が出土している。舟岩8号墳も大型石室であり子持器台片が出土したとされるが、小破片ゆえにその形状は明らかでない。久礼田高松古墳は標準型石室であり、子持器台が出土している。大元神社古墳も標準型石室であろうと推測された。明見彦山3号墳は、玄室長2.8m・玄室幅2.1m⁽²⁾という正方形に近い玄室平面形を呈する。小形の石材が前後左右から持ち送りが見られ、高知では珍しい肥後型の系譜を引くとみられる石室墳である。子持壺が1個出土している。

表2 土佐の装飾須恵器

古墳名	位置	石室分類	装飾須恵器の内容	備考
伏原大塚古墳	香美市土佐山田町	特大型？	子持器台1・子持広口壺1	
舟岩2号墳	南国市岡豊町	大型	子持器台1・子持壺1	
舟岩8号墳	南国市岡豊町	大型	子持器台？	小破片
久礼田高松古墳	南国市久礼田	標準型	子持器台1	
大元神社古墳	香美市土佐山田町	標準型？	子持器台1	
明見彦山3号墳	南国市明見	標準型	子持壺1	
愛宕山古墳	高知市愛宕山	？	子持壺1	
桜ヶ谷1号墳	香美市土佐山田町	？	子持壺1	
大木戸古墳群	安芸市東島大木戸	？	子持壺1	

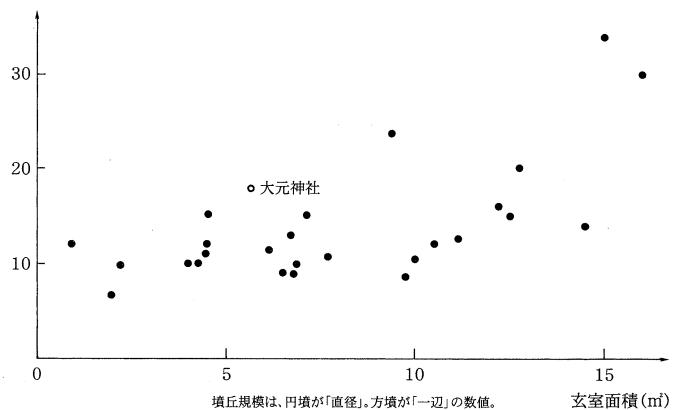


図36 墳丘規模と石室規模の対応

装飾須恵器は首長墳の葬送儀器として当初創出されたものの、前方後円墳に代表される大型古墳消滅後は小規模な古墳や横穴墓からも出土し、使用層が拡大するという（岸本1975・山田1998）。大元神社古墳の子持器台はTK217型式古相まで下る可能性があるので、岸本や山田のいうように首長墳以外の古墳にも装飾須恵器が普及している時期のものであろう。したがって、子持器台の副葬から大元神社古墳を首長墳であると直ちに評価することはできない。

ただ、装飾須恵器の副葬数は土佐において古墳の階層的位置づけを理解する上で重要な要素となりうる（表2）。伏原大塚古墳と舟岩2号墳は2種類の装飾須恵器をもち、前者は特大型石室を持つ盟主的古墳で、後者も大型石室墳であるので地域首長墳あるいはそれに準じる古墳であると評価される。副葬される装飾須恵器が1個体である久礼田高松古墳・大元神社古墳・明見彦山3号墳は標準型石室に属す。資料数が少ないので明確ではないが、複数の装飾須恵器が副葬されるのは大型石室墳以上に限られている⁽³⁾。このことから考えても大元神社古墳は地域首長墳であるという評価を行うことは難しい。

しかしながら、使用層が拡大した後であっても、装飾須恵器が小規模墳から出土することがきわめて少ないことも事実である。1個体とはいえ装飾須恵器を有することは、ある程度のステータスを示す可能性がある。そのような視点で装飾須恵器を1個体出土した古墳を見ると、久礼田高松古墳は金銅装馬具を有する点で他の標準型石室墳と一線を画す。土佐では、金銅装馬具は限られた古墳にのみ副葬され、石室規模・長頸簇とともに古墳被葬者の階層差を示すという（枡家2007）。また、大元神社古墳は標準型石室の中では比較的大きな墳丘を有していた。明見彦山3号墳の石室規模が小さいが、この古墳は肥後型の系譜を引くと見られるので他の畿内系横穴式石室と単純に比較することはできない。よって、これを除くと、土佐では装飾須恵器が標準型石室の上位層以上に副葬された可能性が考えられよう⁽⁴⁾。

総合的評価 石室・墳丘・子持器台の副葬という限られた点からではあるが、大元神社古墳の、とくに階層的な位置を中心に評価を行った。筆者はこれまでに石室規模を中心として土佐の古墳を階層的に位置づけているが（清家2006・清家2007）、それにあてはめると標準型石室を持つ大元神社古墳は、河川や丘陵で区切られる領域を代表する地域首長墳ではないといえる。しかし、墳丘規模は比較的大きく標準型石室の中でも上位に来るものと思われる。この評価は装飾須恵器の副葬からも支持されよう。また、大元神社古墳の立地的な評価とも合致しよう。大元神社古墳は6基からなる前行古墳群の中でも、最も眺望の良い丘陵頂部に位置し、周囲の古墳を睥睨する場所にある。前行古墳群の中で最も優位な古墳であると言えよう。

すなわち、大元神社古墳は、地域首長の下でいくつかの古墳被葬者を率いて古墳の存する楠目一帯を差配した小首長の墓と見なすことができる。

2 高知平野の古墳展開

前節で大元神社古墳の評価を行ったが、本古墳の調査が土佐の古墳研究にいかなる意味を持つかを考えてみることにしよう。そのために、まず高知平野の古墳展開についてあらためて概観してみることにしよう。

土佐の古墳築造については、これまでにも述べられるているとおり、古墳時代前・中期の築造は活発でなく、現在知られている同時期の古墳は十指で足る。土佐における古墳築造は古墳時代後期から盛んとなるが、その中でも数多くの古墳が後期後半から終末期に属する。後期前半には南国市長畠4号墳などの豊穴系横口式石室が築造されるが、横穴系の埋葬施設を持つ古墳が盛んに築かれるのは香美市土佐山田町伏原古墳築造以降である。

伏原大塚古墳以降、すなわちTK209型式期に高知平野に横穴式石室を持つ古墳が点在する。その分布状況を分析した結果、大型石室を持つ古墳は、河川や丘陵などによって区切られた一定の領域に1～2基の割合で分布することが明らかとなっている(清家2006・清家2007、図37)。また、このことからそうした領域区分が存在し、大型古墳はそうした領域を治める地域首長墓としての性格を持つとした(清家2006)。また、特大型石室を持つ古墳は現在のところ岡豊にある小蓮古墳と、伏原大塚古墳の埋葬施設が横穴式石室だとすれば特大型になる可能性があるだけである。後者はTK43型式期、前者はTK209型式期であり、一時期には特大型は1基しか存在しないので、特大型は複数の地域首長を束ね、高知平野を代表する盟主的首長の墓であろうと考えたのであった(清家2006)。

伏原大塚古墳が小蓮古墳に先行し、伏原大塚古墳が盟主的首長墳であったとするならば、TK209型式期には盟主的首長墳が土佐山田から高知平野の中心地である岡豊に移動していることになる。つまり、盟主的首長の地位は安定しておらず不安定であるようすが高知平野では認められた(清家2007、表3)。

3 土佐山田における古墳展開と大元神社古墳

(1) 土佐山田地域の細分

土佐山田の古墳を分析する上で先の論考に関わることで重要なことは、土佐山田地域の細分である。前稿では玄室面積10m²以上の石室を持つ古墳を大型古墳とし、大型古墳の分布からティセンポリゴンを作成した(図37)。ティセンポリゴンは丘陵・尾根・河川などの地形とよく適合することから、こうした丘陵と河川で区画される領域区分が存在したと考えたのである(清家2006)。土佐山田では伏原大塚古墳と新改横走古墳の存在から国分川(新改川)を挟んで南北に2分された。国分川より北を新改地区、それより南側を伏原・楠目地区と仮称して分析を進めることにしよう。

(2) 土佐山田の古墳分布

伏原・楠目地区の古墳 先述の通り伏原大塚古墳は、横穴式石室墳が高知に展開する契機となった古墳であり、土佐山田町で最も古い古墳でもある。伏原大塚古墳についてやや詳しく見てみることにする。香美市土佐山田町百石町に所在し、一辺34メートルの方墳である可能性が発掘調査から示されている。1977年に行われた調査では、長さ7m・幅2mの礫敷きの埋葬施設が検出され、この埋葬施設は竪穴式石室であるとされた（廣田1984）。しかし、出土須恵器が時間幅を持つことや石室床面に礫が敷かれているなどの点から、横穴式石室を誤認したものだとされている（山本・岡本1991、土佐山田町1993）。とくに山本哲也と岡本健児は、1977年に検出された部分は横穴式石室の玄室であると考えている（山本・岡本1991）。この見解が正しいとするならば、玄室面積は14m²となるので、伏原大塚古墳の横穴式石室は特大型石室に分類されるこ

表3 高知平野における大型古墳の動向

	朝倉	一宮	岡豊	明見	高間原	土佐山田	
						新改	伏原・楠目
伏原大塚							
TK209		(一宮大塚)	小蓮・舟岩1号・舟岩3号・舟岩8号	(明見彦山1号)	(三ツ塚下)	新改横走	
TK217	(朝倉)						

凡例 •ゴチックは特大型古墳、あるいはその可能性のある古墳。
・()付きの古墳は年代が不確実なもの。

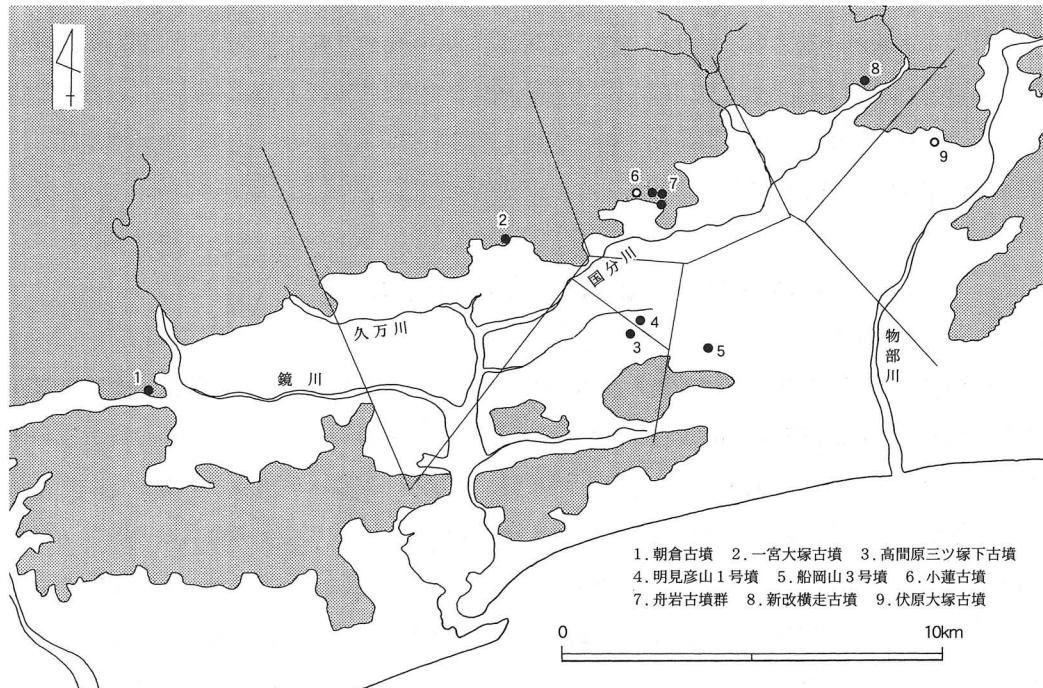


図37 高知平野の特大型・大型古墳の分布とティセンポリゴン

となる。すくなくとも大型の横穴式石室を内包していた可能性が高い。大元神社古墳を含む、伏原大塚古墳の周囲にある古墳も細長い横穴式石室だったので、伏原大塚古墳もまた横穴式石室であった蓋然性はより高くなつた。墳丘周溝から県下で唯一の埴輪が出土し、装飾須恵器を含む50点以上の須恵器・金銅装馬具・鉄鎌などの副葬品を持つ。1辺34mの方墳という数字が正しければ、これまた土佐の後期古墳としては最大規模を誇る。まさしく、横穴式石室墳が高知平野に展開する契機となった古墳にふさわしい。

しかし、伏原大塚古墳に後続する古墳で伏原大塚古墳に匹敵する古墳は周囲に存在しない。その可能性があるものとして大元神社古墳があったのであるが、先述の通り、墳丘こそ一定の規模を誇るが横穴式石室は標準型であった。大元神社古墳以外の古墳は正式な調査を経たものは少ないが、伏原・楠目地区にある小倉山古墳・須江ツカアナ古墳・前行山1号墳・上方古墳などはいずれもTK209型式期あるいはTK217型式期に属し、玄室面積が6~10m²の間に収まる標準型石室墳であった（表1、図35）。未知の古墳がまだ存在する可能性はあるものの、伏原大塚古墳以降は標準型石室墳がこの地区に散在している様子がうかがえよう。

新改地区 伏原・楠目地区に対してTK209型式期の新改地区には横走古墳が築造される。新改横走古墳は、直径15m程度の円墳とされ、玄室長6.6m・玄室幅1.9m・羨道長2.8m・羨道幅1.3mの横穴式石室を持つ。玄室面積は12.5m²で大型石室に属す。須恵器のほか、金銅装馬具・鉄鎌・刀子・耳環・玉類の副葬品が知られている。TK43型式期に遡る古墳は知られておらず、新改横走古墳の周囲に点在する西久保古墳・椎山1号墳などの古墳も横走古墳と同時期か、時期的に下る古墳がほとんどであろうと考えられる。

（3）首長墳築造場所の移動

このように伏原大塚古墳以降の土佐山田においては、古墳展開が複雑である。伏原大塚古墳は土佐山田だけではなく、高知平野を代表とする盟主的古墳である。横穴式石室墳が高知平野に展開とする端緒となる古墳であった可能性が高い。TK209型式期に至り、盟主的古墳は岡豊（小蓮古墳）に移動する（表3）。その後の土佐山田町では、伏原・楠目地区には地域首長墳と想定すべき古墳が見あたらず、小首長墳が散在する。一方、国分川を挟んで新改地区に横走古墳が築造されるのだ（表3、図35）。

このように有力古墳の築造場所が移動する背景には、いかなることが考えられようか。発掘調査はおろか精度の高い石室図面すら少ない土佐において、不確定要素は多いながらもいくつか仮説が提示できる。

一つは、横走古墳被葬者が国分川を超えて伏原・楠目地区一帯までも領域化した可能性がまず考えられよう。伏原・楠目地区には有力首長がTK209型式期段階には不在であり、新改横走古墳の下で伏原・楠目と新改地区が一体化した可能性を考えられよう。

また、領域の細分そのものも俎上に乗ろう。伏原大塚古墳が高知平野を代表する盟主的古墳

であり、TK43型式期において土佐山田でほぼ単独で存在した古墳であった。新改横走古墳はTK209型式期段階において土佐山田で唯一の大型石室墳である。このことから、ほんらい国分川の南北で領域を区分するのではなく土佐山田が一体の領域であり、1人の地域首長によって治められるべき領域であった可能性も考えられる。その場合であっても、伏原大塚古墳と新改横走古墳は約3kmも離れており、連続した首長墓であるとは考えがたい。大型古墳の築造場所が移動していることは重要な問題であり、地域首長権が一つの領域内で移動していることになる。

また、伏原大塚古墳に後続する未知の古墳が存在することも可能性の一つとして考えられる。新改地区と伏原・楠目地区はやはり別の領域であって、新改横走古墳と同時に伏原・楠目地区をおさめる首長が存在したというものである。

上記の諸仮説は伏原大塚古墳被葬者が高知平野を代表する盟主的首長であり、伏原・楠目地区を治める地域首長の役割を兼ねているとの見方に立つものである。伏原大塚古墳は高知平野を代表する古墳であるが、伏原・楠目の領域は個別的小首長や別の地域首長に委ねていたとの考えも成り立つ。

いずれの仮説も現段階ではどれが正しいとも言い切れない。ただ、いずれにしても、TK43型式期段階からTK209型式期段階において、盟主的古墳が土佐山田から岡豊に移動するという現象自体は、土佐において大きな政治的な変動を示すものである。伏原大塚古墳に後続する顕著な地域首長墳が周辺に見つからない現象は、盟主的古墳がかつて存在し、それが移動するという政治的状況とその変動下での作用として考えるべきであろう。

おわりに

本章では、大元神社古墳を土佐の古墳の中に位置づけ、楠目一帯をおさめる小首長墓として評価した。また、大元神社古墳を含めTK209型式期には小首長墓が国分川南部、伏原・楠目地区に散在するが、伏原大塚古墳の後継となるべき大型古墳が不在であることを指摘し、その背景について考察した。しかしながら、考察を通じて痛切に感じるのは当地の古墳調査があまりに少なく、情報が不足していることである。石室の図面や墳丘測量図もない古墳が少なからずある。分布調査も含めて古墳の資料化を計る必要を痛感する。この課題は高知県全体に及ぶものであり、こうした状況を少しでも改善できるよう努力したい。なお、本稿を執筆するに当たり小林麻由氏・久家隆芳氏からご教示を得た。心よりお礼を申し上げたい。

(この章すべて清家)

注

(1) 愛宕山古墳例は廣田1979a論文に記載されているが、小破片であるという。廣田論文は同資料の原典として

『高知小津高校研究誌』という雑誌を掲げているが、筆者はそれを入手しえていない。高知市秦泉寺愛宕山周辺には古墳が複数存在するので、同資料がいずれの古墳から出土したかを確認してから研究の俎上に上げたいと考える。

- (2) 廣田ほか1979cにある石室規模は誤りで、本稿の数字が正しい。
- (3) 大型石室である舟岩8号墳から子持器台片が出土しているが、個体数は不明である。ただ1個体であっても、複数個体の装飾須恵器は大型古墳以上に限られるという論旨には影響はない。
- (4) 廣田典夫(1979a)は、いわゆる巨石墳には装飾須恵器が副葬されないと述べた上で、小古墳群中にある「主となる古墳」に副葬されると指摘するが、このことと本稿の指摘は対応しよう。大型古墳に複数個体副葬されるという点で廣田論文とは異なるが、これは廣田論文が執筆された時点で伏原大塚古墳が未調査だったことと関係しよう。

参考文献

- 岸本雅敏 1975 「装飾付須恵器と首長墓」『考古学研究』第22巻第1号 考古学研究会、岡山：pp. 34-59
- 清家 章 2006 「まとめと若干の考察」『南国市における大型後期古墳の調査』高知大学考古学調査研究報告第3冊 高知大学人文学部考古学研究室、高知：pp. 23-29
- 清家 章 2007 「高知平野における大型後期古墳の動向」『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』真陽社：pp. 447-464
- 土佐山田町教育委員会 1993 『伏原大塚古墳』土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第14集、高知
- 廣田典夫 1979a 「土佐の装飾須恵器」『土佐史談』124号 土佐史談会、高知：pp. 23-31
- 廣田典夫 1984 「高知県土佐山田町大塚古墳」『古代学研究』第65号 古代学研究会、大阪：pp. 24-28
- 廣田典夫 1991 『土佐の須恵器』四国考古学叢書2、高知
- 桟家 豊 2007 「高知平野における横穴式石室墳の系譜と階層構造」『海南史学』第45号 高知海南史学会、高知：pp. 1-12
- 山田邦和 1998 『須恵器生産の研究』学生社、東京
- 山本哲也・岡本健児 1991 「高知県」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国篇 山川出版社、東京：pp. 438-439

遺跡出典

- 大元神社古墳：本書、小倉山古墳：廣田典夫ほか1979b『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会、鏡野学園前古墳：廣田ほか1979b、上改田古墳：廣田ほか1979b、上方古墳：岡本健児1968『高知県史』考古編 高知県、桜ヶ谷1号墳：廣田1979b、椎山1号墳：廣田ほか1979b（前掲）、須江ツカアナ古墳：土佐山田町教育委員会2002『須江ツカアナ古墳』土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書第20集、前行山1号墳：廣田ほか1979b（前掲）、西久保古墳：廣田ほか1979b、西ノ内1号墳：廣田1979b、2号墳：岡本健児1958「高知県香美郡土佐山田町西ノ内二号墳発掘

46 遺跡出典

調査報告書』『高知県文化財調査報告』第9集 高知県教育委員会、伏原大塚古墳：廣田1984（前掲）・土佐山田町教育委員会1993（前掲）、舟岩古墳群（3号墳・8号墳）：岡本健児1968『高知県舟岩古墳群』高知県文化財調査報告書第15集 高知県教育委員会、明見彦山3号墳：廣田典夫ほか1979c『南国市史』上巻 南国市、横走古墳：廣田ほか1979b（前掲）、雪ヶ峯1号墳：廣田ほか1979b。このほかに各古墳出土須恵器については廣田1991（前掲）を参考にした。